

巻頭言(中須賀徳行教授退官記念特別寄稿)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀内, 孝次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3389

巻頭言

岐阜大学留学生センター長 堀 内 孝 次

近年、多くの大学で学内の国際化をより活性化させるため、留学生の受入れ方も従来とは異なっており、単に人数を増やすのではなく、確かな目的意識を持った勤勉な学生を厳選する質的重視への志向変化が見られる。この新たな留学生受入れ対策として、留学生にとって環境順化をし易くすると同時に教育レベルを高めた、日本語指導の一層の充実や学生たちのキャンパスライフに関わる適切な助言と積極的な情報提供が不可欠となってきている。また、協定大学との学生交流を積極的に推進するために日本人学生の派遣拡大についても全学レベルでの強化システム策が必要視されている。本学のような中規模国立大学では、国際化推進に関わる全学体制を構築する上で、留学生センターの果たす役割は極めて大きいといえる。

さらに、各大学で独立行政法人化を目前に特徴ある多くの施策が講じられている中、留学生センターの役割も新たな方向性を見据えたものに変容しつつある。確かに大学の留学生施策とその実績は、その大学の国際化推進程度の評価にもつながり、今日の大学全体の評価要因として極めて重要である。岐阜大学の場合、全留学生のうち大学院生が占める割合は62.6%（2002年10月1日現在）である。従って彼らの大学における研究活動状況は同時に大学の国際化の活性程度と直結する点が少なくない。ところが来学当初の彼らの日本語能力は、母国で日本語を勉強している交換留学生を除くと極めて低いものである。従って、留学生センターが日本語指導することで言葉による障壁を取り除き、彼らの生活及び研究環境を改善することは、彼らにとって大変意義深いものといえる。

学内の教官の中には、留学生センターは留学生や留学希望者を対象とした教育機関であるから留学生センター専任教官は専ら留学生教育のみで研究活動は殆ど出来ないであろうと考える者も少なくないかもしれない。当然のことながら、留学生教育が充実すればするほど研究活動に充てる時間は少なくなる。しかし、これらに対する明確な彼等の主張が論文発表である。留学生センターの紀要は専任教官が教育者であるとともに研究者でもあることの確かな証である。従って、センター紀要の発刊にかける専任教官の想いは各学部の研究報告や紀要に寄せる以上のものがあると併任の立場にある私には思える。

ところで、国際化の推進を目指す本大学に国際交流関係の諸事についての積極的な支援あるいは助言や協調を望む地域自治体等からの声が多くなってきている。この点も大学における地域貢献として留学生センターが果たす今後の役割はさらに大きくなり、地域との多様な連携事業が大学としての重要施策の一つになることが容易に予測される。このような状況にあって、年報を含む留学生センターの紀要は、留学生センターの年間事業を含めた活動状況の詳細を近隣地域に対しても積極的に公開するものであり、その内容には将来のセンター活動の充実を図るための真摯な努力の実態が掲載されている。なお、これらの活動成果は本部留学生課との密接な連携によってなされてきたものであることをここに挙げておく。

今回の紀要もこれまでと同様、非常勤講師の方々の論文も含め、良質な内容になったと自負している。是非、一読され、ご批判いただければ幸甚である。

なお、本号では特別寄稿を本学留学生センターの中須賀徳行教授にお願いした。同教授は平成15年3月31日をもって岐阜大学を退官されるが、これまで本学在学中に培われた貴重な留学生教育の蓄積と足跡を改めて留学生センター紀要にお纏め頂いた。今後とも先生のご活躍とご健勝を祈念するものである。